

---

# ゲームの世界へようこそ

鯨岡 啓介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゲームの世界へようこそ

### 【Nコード】

N7353N

### 【作者名】

鯨岡 啓介

### 【あらすじ】

ログアウトの不可、痛覚リミッターのオフ、人格を持ったNPCの出現。

ゲームは終わりを告げ、ゲームの世界がプレイヤー達の現実となった。

現在の最下層は79階 掛かった時間はゲーム時代から含めて2年。

難易度が上がり続けるダンジョンに、しかし攻略組みは、おおよそ1年もあれば100層に到達できるだろうと予想を立てた。

攻略組みのプレイヤーの佐山 式は少女と会った。  
その少女の余命はあと半年だった。

## prologue

「……おいおい、なんだこのアップデート」

佐山 式は呟いた。

アップデート内容にはない ダンジョン探索型—VR《ヴァーチャルリアリティ 仮想現実》MMO、そのアップデート  
それはダンジョンそのもののアップデートではなく外界、つまりは町や草原の追加であった。

ダンジョンとは趣の違う つまりそれはゲームを構成する素材の流用が出来ないということ、必然的に容量は大きくなる、それはいい、それは分かっている。

しかし、これはなんだ？

己がゲーム機、まるで工事現場のヘルメットのようなもの  
VR G G。  
リアルタイムゲームギア ヴァーチ

被ったそれ、非VRゲーム起動時にディスプレイに映されるスクリーンに表示されるもの。

容量が不足しています

あり得ないだろ、と佐山は呟いた。

インストールを中断し、VR G Gのコンフィグをみると残容量は80%。

それで足りないのだ。

「同機種の中でも最大容量のはずなんだがな……」

そういつつも佐山は再度インストローラーを立ち上げ、必要容量を確認する。

表示されたそれ      3エクサバイト。

3,000,000,000,000,000,000,000バイトだ。

「ゲーム本体よりも重いのか」

—ゲーム本体《TARTAROS      タルタロス》の容量は400テラバイト。

ゲーム本体よりも8倍近い容量をもつそれは、もはや以前までのものが体験版とでもいうかのようで……。

「どうしたもんか、な、っと」

いいつつ、VRGGを頭から外す佐山。

VRGGの最大容量は3・5エクサバイト      つまりは余分なものを全て消去してしまえばぎりぎりでインストールすることが出来る。

顎に手をやり、思案する      数秒後、PCにデータをコピーして保存すればいいのだと思い至り、佐山はそれを実行した。

VRGGにコネクタを差込み、PCと繋げ、PC上にデータをドラッグし、コピーをする。

アイコンとともにコピー中の表記がされ、それが示すには3分の時間。

ちよつと時間がかかるなと思いつつ、VRGGをデスクトップの上に置き、んつと伸びをする佐山。

その際にふと視界が縦置き方の鏡に入り、佐山の姿を瞳に映した。

日本人らしい黒髪、黒瞳　長身で髪型はショートウルフ。  
容姿は整っている、が、それよりも目を引くものがある。  
筋肉だ。

引き締まったそれは戦うものの体である。

数瞬己が姿を見ていた佐山は　しかし、はっとため息をつき視線を逸らした。

仮想のゲーム  
VRMMOやってるやつ身体じゃねえよなと苦笑をこぼし、瞼を閉じた。

二三分瞳を閉じて休憩でもしてるかね、と。

ピコンというコピーの完了を知らせる音と共に佐山は瞼を開けた。  
VRGG内の不要なデータを削除し、インストローラーを起動する。

アップデートが開始され、目の前にウィンドウが表示された。

「……………あん？」

だがそれはアップデートの進行状況を示すものではなく、別のもの　身体情報の取り直しの通告。

VRGGでは仮想空間において自分のアバターが動く際に、現実世界にある本体が動く事を阻止するために、脳の電気信号を途中で止める機能がある。

それには身体データが必要なのだが……それは月1のチェックの  
はずなのだ。

記憶が確かならば佐山が最後にチェックしたのは先週、ならば  
チェックは必要ないはずなのだが、現に今チェックの要請がきている。

「アップデートの影響かねえ……」

そう判断し、深く思考することなく選択肢のはいを実行。  
瞬間、意識が切り替わり視界が真っ白な空間を映し出す。

音はない、だがゲームの中にはいったのだと、経験から佐山は判断した。

真っ白な空間、踏みしめているはずの地面ですら白く、またそこにはなにもない。

「テスト空間、か？」

ゲーム機への負担を極限まで削除した空間なのか？  
だが、そんな佐山の考えは次の瞬間否定された。

『 ゲームの世界へようこそ 』

そんなアナウンスが響き渡ったからだ。

## prologue (後書き)

実はタルタロスというゲームは実在したりします。

この小説とはなんの関係もありませんが、タルタロスという意味のために名前を使わせていただきました。

もう片方の小説を優先させる(予定)ですので更新はまったりした  
ものになります……多分。



## ゲームの世界

否、それはアナウンスではなかった。

高く耳障りな声　そんなものがアナウンスであるわけがない。

『　繰り返す、ゲームの世界にようこそ』

その二度目の声と共に、佐山の眼前に立体的な人型の黒い影が表れた。

輪郭は曖昧で、黒と部屋の白が混ざり合い灰となっている。

おいおい、どういうことだこれは。

佐山はそう疑問に思った。

ゲームのアトラクションにしては悪趣味だ、というよりも論外だ。目の前のものはあるだけでこちらを不愉快にさせるもの。

そんなものが遊戯<sup>ゲーム</sup>にあつていいわけがない。

何より、何よりだ。

「俺はまだ”インストール”を開始していない」

そう、実行したのは身体情報のチェック　つまりは保護プロゲ

ラムの更新。

故にこれがゲームのアトラクションということはありえない。

黒い影が震えた。

『くっ、ははははっ！　よくぞ、よくぞ気づいたね！

いやはや、同類から送られてくるデータを見ても、そのことに気が付くのは十人に一人と言ったところだね？

自分の担当もそうではつまらないと思っていたところだよ』

言いつつ、黒い影は更に震える

表情は窺えないが明らかに目の前のソレはこちらをあざ笑っている　佐山はそう感じた。

だが、情報も何もないこの状況。

これに聞くしかないのだろう　不快感を押し殺し口を開いた。

「……………なんだこれは、答える」

「……………ふむ、気づけたご褒美に答えてあげよう　なんてね、嘘だよ嘘。

元から話すようになってるんだな、これが。

そうその通り、君はまだインストールをしていない……………そう思っているはずだね？

いやはや傑作だねえ」

「実際インストールはしていな……………っ！」

言っている最中に佐山はソレに気づいてしまった。

「ああクソ！」

そういうことがクソったれ！」「

震える、震える、人型の黒い影がお腹を抱えるようにし、震える。

「そっだよ、そうそう！　やっぱり気づいたか！　お兄さん頭いいねえ！

でも、そっだね……………数分早く気づくべきだったかな？

もう手遅れだよ？」

厳密に言えばインストローラーを立ち上げた時点でゲームは始まっている。

そう、”それが”問題なのだ。

VRGGでは仮想空間において自分のアバターが動く際に、現実世界にある本体が動く事を阻止するために、脳の電気信号を途中で止める機能がある。

つまりは、機能の中止命令を送らない限り、現実世界の身体を動かすことが不可能となる。

ゲーム世界でなんらかの不具合がおり、ログアウトが不可能になった場合、現実世界の身体を動かすことが出来ずにやがて死に至る。

だからこそ”ゲーム機本体”に身体保護プログラムが組み込まれている。

電源切断時に予備バッテリーによる強制的なログアウト、ログアウト不可空間においても時間による強制グアウト、身体に異常をきたした場合の強制ログアウトなど、幾重にも保護策が練られている。そしてゲームは身体保護プログラム無しには”プレイ”することができない。

それが本来の身体保護プログラム、だ。

だが、今回はどうか？

ゲームを立ち上げた上でインストローラーを起動し、その上で”ゲームに付属”されている保護プログラムで、現在の保護プログラムを”上書き”した。

つまりは”保護プログラムという名前の何か別のもの”でゲームをプレイ出切るようになってしまったのだ。

「だが、VRGGにはそういったことへの対策がとられているはずだっ」

それを理解した上で、しかしまだ超えなければいけない壁はある。だから佐山の言った言葉は正しい。

もっとも、本人自体がその言葉を信じていないのだが。

「くくくつ、嫌だなあお兄さん？」

”それ”が解決しているからこうしてどうどうと言ってるんじゃないか。

対応策？ あはははっ、なるほどなるほど、確かにそんなものがあつたねえ。

例えば、プログラムの暗号化。

例えば、改変に対するプログラム上の相互作用。

だけどね？お兄さん。

そんなものは時間と技術      それと法律を犯す覚悟さえあればなんとでもなるんだよ？」

そう、その通りだ。

だが誰が想像する？

企業単位で世間に確実に露呈せる犯罪を犯すなどと。

「……クソが」

「あははっ、だよねだよね！ 僕もお兄さんの立場だったらそう思うよ！」

うん、呪詛を吐く時間はまだあるよ？

だって今ゲームをダウンロード中だもの、ね。

だけどいいの？ それもあと数分で終わるけど、さ。

今聞きたいことを聞かなくていいの？



黒い影はあたかも悩むかのように顎と思われる場所にこれまた手  
と思われるものを添え、

「……うーん、僕らには目的はないよ。

今この場の案内役として舞台上に上がったただだからね、僕は。

あははっ、ごめんごめん。 そんな顔をしないでよ、ちゃんとわ  
かってるってば。

だけどこめんね？ 知らないんだソレ。

強いて知っていることといえば社長、坂上 さかがみ ただあり 唯有の願いつてこと  
かな？

ソレ以上は知らないし、知っていたとしても教えられないね」

答えのそれは嘘をついているものとは思えない、だがそれは佐山  
の求めた答えではなく、つちと佐山は舌打ちをした。

「……、次だ。

ログアウト方法、ゲームの脱出方法は”有る”か？」

「当然あるとも、なんたつてゲームの世界だからね！

ゲームクリアがそれだよ     つと、クリア方法はご存知の通り、  
地下100層の踏破さ。

知つてのとおり、現在の攻略階層は76フロア。

あと四分の一もないさ！」

「……そこまで来るのに運営の開始から2年たつてるって言つのに  
気軽にいつてくれるな」

「そりゃ勿論他人事だからね」

殴り飛ばしたい衝動を堪えた佐山は次の質問をした。

「俺たちの現実の身体はどうなる？」

「病院に搬送される予定だね、詳しい説明は不要だから省くけども。」

なるほど、どうやらすぐに死ぬようなことはないらしい。

次の質問、佐山は半ば確信をもって訊ねた。

「”確認”だ、お前人間じゃないな？」

「正解っ！ 良くわかったねお兄さん」

考えてみれば分かる事だ。

これがオンラインゲームである以上、アップデートの直後は何千人単位の人が同時にアップデートを受ける。

その一人一人に人間のサポーターが付くわけではない、

何故ならば運営側は少数の人数で圧倒的多数のプレイヤーの対応をするのだから。

そして何より、

「こんなにうざったい人間がいるわけがないだろうが」

その言葉に、黒い影はうつわーショックだな、全くひどいことを言うね？などと言い。

「ありや、もうすぐダウンロードがおわっちゃうみたいだ。名残り惜しいけれど時間的に最後の質問、かな？」

そう答えた黒い影の言葉に、佐山は丁度いいと思った。もとより次が最後の質問だったのだ。

「このゲームは　タルタロスは何が変わった？」

「くっ、ははっ、やっぱり最後はそういう質問か。

うん、答えようお兄さん！

大筋は以前と同じままだよ。

ただ以前がゲームだったとするならば、今はもうゲームじゃない。そうだね、ゲームの世界っていう”現実”かな？

まっ、そこらへんは実際に体感するのが一番だろうね。

だから僕が伝えるのは、そうだね、仕様の変更さ。

1．ログアウトの不可。

2．痛覚のリミッターの解除　とは言っても擬似的なもので現実世界の身体には影響がないからそこところは心配いらずだよ？あははっ、まあ全然うれしくないだろうけどさ。

ノンプレイヤーキャラ

3．NPCに対する人格付与　。　まあ僕みたいな人間に近いNPCになるっただけさ。

あとは大体今までどおりだし、アップデートの内容もそのままさ。とまあ？　こんな感じかな？

おっと、時間みたいだね　最後に何か言いたいことはある？」

佐山は、ああと黒い影を見据えて、

「お前が敵としてでてくることを祈るよ」

もし出てくるのなら絶対につづ潰す、そう佐山は思った。

「　くっ、ははははっ、いやはやそれは残念。

僕はここでお兄さん達を紹介するだけの使い捨てでね、ここでお別れなのさ。

さてどうやら本当に時間みたいだし、最後の言葉を持って僕の存在を締めさせてもらうよ？」



影が揺らぎ、白に色が付いていく。

薄れる影と対照的に始まりの町が色を濃くしていき、そして町に  
いるプレイヤーを映し出す。

罵倒、泣き声、叫び声　そんなものが耳に入ってくる。

「見ての通り今始まりの町は阿鼻叫喚さ、けどね、それでも僕達は  
いうよ」

もはや空気とほとんど同化してしまった影、目を凝らしても認識  
するのが困難になっている。

だが佐山には分かった。

影は震え、嗤っている。

「ゲームではなく、ゲームの世界にようこそ」

## ゲームの世界（後書き）

これで導入は終わりです、いかがでしょうか？

気が付いたら三時間以上書き続けていた気がします。

やっぱり最初のほうは書きにくいですねー

## PT募集

佐山は掲示板を眺めていた。

その後ろには石造の神殿、その階段部分に数十人の冒険者が腰をかけている。

その冒険者の大部分がプレイヤーであり、しかし中にはそうではないNPCも含まれている……のだが、一見しただけでは判別することが出来ない。

VMMOに置いてても顕著なものであるNPCの表情の固定化がないからである。

加えて書くならば居場所に関する制限もない。

好き勝手に動き回り、好きなように感情を表現し、好きなように人と関わる。

とはいえ、それは本来のNPCと比較するからこそそういうのであって、このゲームに閉じ込められた人は大抵こう言う。

”住人”と。

ノン プレイヤー キャラという表現は正しくない 何故ならば彼らは”人間らしすぎる”からだ。

故にこのゲームに閉じ込められた人は、”このゲーム世界の住人”という意味で住人と呼んでいる。

彼らはこのゲームの世界で生きている。

それが このゲームに既に一ヶ月間掟えられている人たちの出した結論である。

「今日はソロか、もしくはいつものお仲間と一緒にじゃないのかな？」

その声に佐山が振り返ると、誰もいなかった 否、誰も見えなかった。

「オルトスの爺さん、か。

いや何、マーケットに流れていない装備で欲しいものがあってな。  
レアドロップである上に人気のない狩場で　　っ！」

脛に激痛、思わず佐山がしゃがみ込むと、目の前に筋骨隆々のひ  
げを蓄えた男性オルトスがいた。

目と目が合う。

佐山はしゃがみ込んだ状態で、オルトスは佐山の脛にローキック  
を叩き込んだ状態で、だ。

「相手の目を見て話さんかい」

「ドワーフ」相手にどうやって目を見て話せっていうんだ？

あれだ、この前だって立ちながら目を見て話したら、見下すんじ  
やないとかいってキレイがったじゃねえか」

鍛冶用のつなぎを着たまま（つまりは仕事着）酒瓶を片手に、佐  
山を左手の人差し指で指してオルトスはカッカカッと笑った。

「じゃから、そうしてお主が地面に座りこんで、じゃよ」

その言葉に佐山は、はあ……とため息をついた。

からかわれているな、そう理解し、しかしそうと分かっても溜飲  
が下がらなかった佐山は、未だに己が脛に当てられているオルトス  
の足をやや強めに左腕で払った。

「フルプレート装備とかだったら座りにくいだろうが」

そついいつつも、足元の大きな石を手で取り払い、胡坐を組ん  
で座るあたり佐山の性格が現れている。

「かつ、レザーアーマーがよく言うわい」

「……ブリガンダインだ、初心者用の装備と一緒にすんな」

佐山の現在の姿は、ブリガンダインと呼ばれる外に革内に金属をつなぎ合わせて作られた防具に、腰当、防具の内に着る無地の黒いTシャツにズボン。

銀色に鈍く光る両手のガントレットに腰に据えられている刃渡り70cmほどの片手剣。

神殿前に佇んでいるほかの冒険者に比べて明らかに軽装である。

大抵の冒険者は全身を包むフルプレートアーマーをつけているからだ。

「わしから見れば最近の冒険者は皆初心者はつしやだて。

それに実際はどうであれ、お前さんの見てくれは初心者じゃろう？  
それが戦闘スタイルなのは分かるがの、もう一つ剣を持つか盾を持つかせんとスキルを使えんじやろうて。

戦いの邪魔になるようなら、ほれ……前に言っておいた通り小型の盾を作ってやるわい、二の腕に取り付けるタイプのやつを、の」

言つて、かかつと笑うオルトスを前に、本当気持ちよく笑う爺さんだよなと佐山は思った。

向けられているものは好意 何故それが向けられているか佐山には分からなかったが、その気持ちはありがたいと素直に思った。  
だがだからこそ困るのだが。

「あー、その、なんだ？

ちゃんと武器は”2種類”装備しているから、心配してもらわなくても大丈夫だ」

その言葉にオルトスは目を丸くした。

つまり、そういうことかのか？と訊ねたオルトスに佐山は頷いた。  
タルタロスにおいて武器装備枠は二つある。

正確には盾を含めているので武器だけではないが、基本的にどのタイプのキャラクターでも二枠は埋める。

例外的に大剣やハンマーや双剣などの武器は一つで二枠をとってしまうが、片手剣はその名の通り片手、1枠である。

通常は、魔法剣士ならば魔法の媒介としての指輪、剣士であるのならばスモールシールド、騎士であるのならばラージシールドがサブの装備として選ばれる。

装備によるステータスの上昇は勿論（ただしステータスが下がるものもある）、何よりもスキルシステムの恩恵のためだ。

それがメインの装備かサブの装備かによってステータスの上昇や使えるスキルに差が出るものの、装備によるスキルの増加はタルタロスにおいて絶大な影響を及ぼす。

何故か？ 簡単なことだ スキルシステムとは現実世界では単なる一般人でしかないプレイヤーに、その道の達人であるかのような攻撃を行えるようにするものであり、またそれだけでなく、現実では不可能なものも可能にするものであるからだ。

例えば盾のスキルの中にはパリングというものがあり、初動のタイミングさえあっていれば己の体が半自動で動き、相手の攻撃を弾くというものがあるのだが これは、あくまでも例えばの話ではあるが、例えば全長数メートルのトロールの攻撃においても適応される。

明らかに弾く事のできない攻撃を、スキルによって弾くことができるのだ。

もつとも中にはそういった弾き行為自体が不可能なスキルもあるのだが……

ともあれ、佐山はそういった恩恵があることを分かった上で盾を装備していなかった。

「珍しい組み合わせもあったもんじゃな……というかそもそも両立できるのかの？」

「全く出来ない　だから正直別々に使っている」

「なんともまあ……否効率的じゃの。」

まあそういうことなら好きにするといいじゃろって……ふむ、  
ところで」

「あん？」

「先ほどの質問を繰り返す形になるが、何でお前さんがPT募集の  
掲示板なんぞみておるんじゃ？」

「……ああ、さっきも途中まで答えたけれど、欲しい装備があるんだが　どうにもマーケットにさえ流れてなくてな。」

それなら取りに行くしかないんだが、如何せんソロだと数がこな  
せなずレアなんぞ出せる気がしない。

それならPTで言って、もしも出たら手に入れたプレイヤーから  
高値で買い取ろうと思ったんだが、人気のない狩場だからそもそも  
PT募集自体がなくて、さっきから募集が立つのを待っていただけ  
だ。

とはいえ……一時間近くまって出来ないとなると諦めてソロで狙  
ったほうがいいか……？」

実際に装備を売ってもらえるかどうかはさておき、やはりソロで  
いくよりもPTでいったほうが経験値効率はともかく、アイテムド  
ロップ率は上がる。

別段ゲームの仕様というわけではなく、PTで狩りをしたほうが  
より簡単に狩れるので、ただその分だけ数をこなせるのである。

が、このまま何時間もここでまつくらいならば、効率が悪いと分  
かっていても装備をソロで出しに行くか、はたまたマーケットに並  
ぶのをまつかをしたほうがいい気がする。

「……ふむ、こちら辺で人気がないというと70フロアあたり……かの？」

「正解　って言っても人気のない狩場はそれだけじゃないはずなんだがどうして分かったんだ？」

70フロアは壁が土くれや岩で構成されており、狭く入り組んだ通路が特徴で、まさしく地下迷宮と言うべきものである。

が、地下迷宮を題材としてゲームである以上　それらしいステージが簡単なわけがなく。

手にはいる経験値にくらべ強力な敵モンスターが多数出現し、特殊効果をもったモンスターも多く出現する。

またそれだけではなく、固定の場所だけでなくアクティブに冒険者を探し続けるボスモンスターも存在する。

だが、その代わり手にはいる装備はよく、他のぱつとしない狩場と同程度の人気のなさなのだが……

そう疑問に思い佐山が訊ねると、オルトスはドワーフ特有の濃い髭をぶほつと揺らして笑い。

「クツカカ、いやなに　PT募集が丁度たつての？」

それだったらおもしろいなと思うていってみればピシヤリかつ！」

言われ、ようやくかと思いつつ背後に振り返ると掲示板の一番上、新規の欄にそれはあった。

70F 薄闇の迷宮装備収集PT

表示されているそれ、

「チェック」



募集を意識しながらそう言葉に出すと、詳細が表示された。

目の前に展開された半透明の説明文を読むと3 / 4と表示されており、入れるのはあと一人のようだ。

今たったばかりのPTだということを考えるにこの三人は当初から組んでおり、バランス構成のためにあと一人を募集したのだろう。埋まってしまつては困る　が、しかし募集要項とは違う条件なのに俺が入ってしまったては迷惑をかける、と佐山ははやる気持ちを押さえ、募集要項を読んでいく。

レベル70以上の前衛　問題ない。

ドロップはアイテム獲得者のものである　問題ない、交渉がダメそうならばおとなしく引き下がればいいだけだ。

書かれていたのはそれだけ、つまりは条件は満たしている。

「……大丈夫そうかの？」

背後からの声に佐山は振り返り直し、

「ああ、大丈夫みたいだ。

オルトスの爺さん悪いが俺はいくよ」

「おう、いつてこい坊主」

ぐつとオルトスは親指を突き立てた。

募集要項は表示されたままである、だから佐山は転送のキーワードを口にした。

「ムーヴ」

瞬間、佐山の姿はオルトスの前から消えた。

PTの集合場所へと飛んだのである。

「若いというのはいいのう……」

”NPC”オルトスはそう呟いた。

ドワーフなどという人種は現実には存在しない。

**P T募集（後書き）**

まったり更新……です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7353n/>

---

ゲームの世界へようこそ

2010年10月15日05時44分発行